

# 有喜貝塚

1984. 3

諫 早 市 教 育 委 員 会

## 序

長崎県考古学の発祥の地である有喜貝塚は、大正14年に京都帝国大学の浜田耕作博士により調査がなされ、歴史的・学術的に重要な位置を占めています。

この遺跡は、橘湾に臨む台地上にあり、そこから眺める景色は誠に美しく、昔、有喜の貝塚に住んだ人々も、同じような光景を眺めたてありましょう。

眼前には豊富な資源をもつ海があり、また後背地には動植物に恵まれた山があります。今回の調査では、当時の生活を知る上で欠かすことのできない多くの資料が得られました。これらの資料を見る時、私達は過去の歴史を体現できるように思えてなりません。歴史が身近になったとも言えましょう。

各種の文化財は貴重な財産であり、後世に伝えることは私達の責務であります。

本書が文化財保護行政および学問の進展に寄与することができれば幸甚に存じます。

なお、発掘調査、整理作業に際し、ご指導・ご助言を賜りました関係機関、関係者をはじめ、炎天下のもと、作業に従事して下さいました皆様に対し、衷心より感謝申し上げます。

昭和59年3月31日

諫早市教育長 西原 英麿

## 例 言

1. 本書は六本松地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う、有喜貝塚および六本松遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は諫早市役所建設部土木課の依頼を受けて諫早市教育委員会が実施し、出土遺物については諫早市郷土館において保存・公開している。また、人骨については長崎大学にて保管している。
3. 人骨鑑定については長崎大学医学部解剖学第二教室内藤芳篤教授，松下孝幸講師に依頼し，松下氏より調査結果についての玉稿を賜った。
4. 貝類の同定については長崎県立長崎北高等学校教諭山本愛三先生に依頼し，分析結果についての玉稿を賜った。
5. 本書の執筆者は次のとおりであり，挿図，図版等も各々担当して作製した。  
I・II・III・IV・VII ……秀島貞康  
V ……松下孝幸  
VI ……山本愛三
6. 遺構の実測・写真撮影は秀島，古賀佐徳が行い，遺物の実測・トレース・拓本・写真撮影は秀島・古賀が担当し，中野章子・山口玲子の協力を得た。また，人骨については松下氏，貝類については山本氏によるものである。
7. 本書に使用した高度値は海拔高である。また，方位は磁北を示している。
8. 本書の編集は秀島が行った。

# 本文目次

序

例言

I 調査にいたる経緯 .....	1
II 遺跡の立地と環境 .....	3
III 遺跡の調査 .....	7
1. 調査の経過 .....	7
2. 調査区の設定および層序 .....	9
3. 遺構 .....	10
IV 出土遺物 .....	13
1. 遺物出土の状況 .....	13
2. 土器 .....	14
3. 石器 .....	38
4. 骨角牙器・貝輪 .....	58
5. 土製品 .....	60
V 有喜貝塚出土の人骨 .....	62
VI 長崎県・有喜貝塚の貝類より見た考察 .....	69
VII まとめ .....	78

## 挿 図 目 次

第1図 諫早市位置図(1/1,600,000) …… 3	第23図 C区II層出土石器(1/2) …… 47
第2図 遺跡分布図(1/40,000) …… 4	第24図 C区III層出土石器(1/2) …… 48
第3図 遺跡周辺地形図(1/5,000) …… 6	第25図 C区IV層出土石器(1/2) …… 49
第4図 不明土墳(1/30) …… 10	第26図 D区I層出土石器(1/2) …… 51
第5図 遺跡地形図(1/300) …… 11	第27図 D区I層出土石器(1/2) …… 52
第6図 土層断面図(1/50) …… 12	第28図 D区II層出土石器(1/2) …… 54
第7図 C・D区土器接合関係図(1/50) …… 13	第29図 D区II層出土石器(1/2) …… 55
第8図 A区I・III層出土土器(1/3) …… 17	第30図 D区II層出土石器(1/2) …… 56
第9図 B区II・III・IV層出土土器(1/3) …… 19	第31図 D区III・Pit出土石器(1/2) …… 57
第10図 B区V層出土土器(1/3) …… 21	第32図 骨角牙器・貝輪(1/2) …… 59
第11図 C区I・II層出土土器(1/3) …… 23	第33図 土製品(1/3) …… 61
第12図 C区III層出土土器(1/3) …… 24	第34図 遺跡 …… 65
第13図 C区IV層出土土器(1/3) …… 25	第35図 有喜貝塚位置図 …… 69
第14図 D区I層出土土器(1/3) …… 27	第36図 有喜貝塚周辺位置図 …… 69
第15図 D区I層出土土器(1/3) …… 29	第37図 有喜貝塚地形図
第16図 D区I層出土土器(1/3) …… 30	および調査区位置図 …… 70
第17図 D区II層出土土器(1/3) …… 31	第38図 A区土層断面図 …… 70
第18図 D区II層出土土器(1/3) …… 33	第39図 B区西壁土層断面図 …… 71
第19図 D区II・III・Pit出土土器(1/3) …… 35	第40図 B区北壁土層断面図 …… 71
第20図 E区出土土器(1/3) …… 37	第41図 C区土層断面図 …… 72
第21図 B区V層出土石器(1/2) …… 44	第42図 D区土層断面図 …… 72
第22図 C区I層出土石器(1/2) …… 46	第43図 大正14年発掘現況図 …… 73

## 表 目 次

第1表 遺跡地名表 …… 5	第6表 A・E区石器器種別一覧表 …… 40
第2表 土器調整手法一覧表 …… 15	第7表 B区石器器種別一覧表 …… 41
第3表 土器調整手法一覧表 …… 16	第8表 C区石器器種別一覧表 …… 42
第4表 石器組成表 …… 38	第9表 D区石器器種別一覧表 …… 43
第5表 石材別一覧表 …… 39	第10表 土製品法量表 …… 60

第11表	出土人骨片	62	第17表	大腿骨主要計測値	68
第12表	大正14年出土人骨	65	第18表	腓骨計測値	68
第13表	脳頭蓋計測値	65	第19表	長崎県有喜貝塚の 貝類を中心とする組成表	74
第14表	顔面頭蓋計測値	66	第20表	有喜貝塚層別土器出土状況表	75
第15表	推定身長値	67	第21表	各区出土土器一覧表	79
第16表	尺骨計測値	68			

## 図 版 目 次

1	遺跡遠・近景および各区土層断面	6	D区・E区出土土器および B区・C区出土石器
2	C区・D区遺物出土状況	7	D区出土石器、骨角器・貝輪および 土製品
3	D区遺物出土状況および A区・B区・C区出土土器	8	有喜貝塚出土の人骨
4	C区・D区出土土器	9	有喜貝塚出土の貝類
5	D区出土土器	10	表土及び表採土器

## I 調査にいたる経緯

有喜貝塚は、大正14年京都大学の浜田耕作氏によって調査がなされ、<sup>註1</sup>縄文時代中期～後期の代表的な遺跡として周知化されていた。

この有喜貝塚および六本松遺跡が今回の緊急調査の対象となったのは、諫早市が昭和57年度から継続事業として実施している急傾斜地崩壊対策事業に関連するものである。千々石断層によって生成された崖面の比高は低い所で4～5m、高い所で約10mを測る。この急峻な崖下に多くの民家が密集しており、崩壊の危険性は極めて高く、事実数ヶ所で降雨に伴う崩壊が認められた。崩壊危険区域として長崎県から指定を受けたのは長さ150mに亘っている。

指定区域150mのうち、20mについては昭和57年度事業として既に完成しており、その時の事前調査では包含層の存在が認められなかった。が、昭和58年度以降の工事には有喜貝塚の本体部分と六本松遺跡の遺物散布部が含まれていたため、担当課との協議を行い、遺跡の最大限の保存を図る方向で工事を実施することとし、崖面上場2～4mの部分について緊急調査を実施する運びとなった。

工事関係者は次のとおりである。

檀野  士郎	諫早市役所建設部長
神尾  廣	〃 建設部次長
伊藤  秀敏	〃 土木課長
馬場  邦晴	〃 土木課長補佐
喜多  徳之	〃 工務係長
古賀  俊一	〃 〃 事務吏員
御所  政久	〃 〃
藤山  哲	〃 〃 技術吏員

調査関係者は次のとおりである。

西原  英麿	諫早市教育委員会教育長
山口  隆昭	〃 教育次長
松尾  誠	〃 社会教育課長
山口  勝実	〃 〃 課長補佐
鶴田  勲	〃 〃 指導係長
木原  保夫	〃 〃 事務職員

平古場 豊 諫早市教育委員会社会教育事務職員

草野マスエ // // //

秀島 貞康 // // // 調査担当

調査協力者は次のとおりである。

古賀 佐徳

内藤 芳篤 長崎大学医学部教授（解剖学第二教室）

松下 孝幸 // 講師（ // ）

山本 愛三 長崎県立北高等学校教諭

調査外業および整理作業

大崎政子, 佐藤ツルエ, 浜真美江, 前田安代, 浜チヅハ, 浜セツエ, 吉谷成子,

平古場久美子

発掘調査・遺物整理に際しては、下記の方々および機関にご指導、ご助言を頂いた。ご芳名を記し深甚の謝意を表する次第である。（敬称略・五十音順）

麻生優, 安楽勉, 諫早市郷土館（野中素, 吉田碩男, 山口玲子）, 稲田三千年, 稲富裕和, 古賀力, 佐藤惣作, 下川達彌, 高野晋司, 田川肇, 立平進, 長崎県文化課, 長崎大学医学部解剖学第二教室, 永松実, 中野章子, 浜徳五郎, 浜義男, 浜義光, 平野敏和, 宮崎貴夫, 村川逸朗, 渡邊康行

なお、本年1月15日、調査事務担当の古賀俊一氏が夭逝されました。

ここに深くご冥福をお祈り申し上げます。

註1 浜田耕作・小牧實繁・島田貞彦 「肥前国有喜貝塚発掘報告（上）・（下）」 『人類学雑誌』  
A1-1・2, 1925

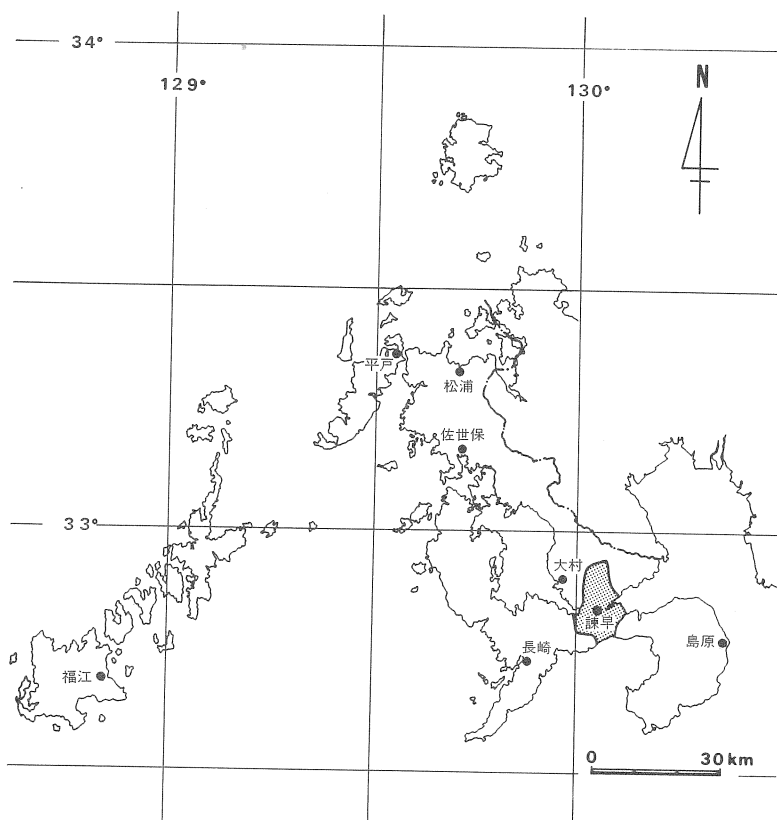


## II 遺跡の立地と環境

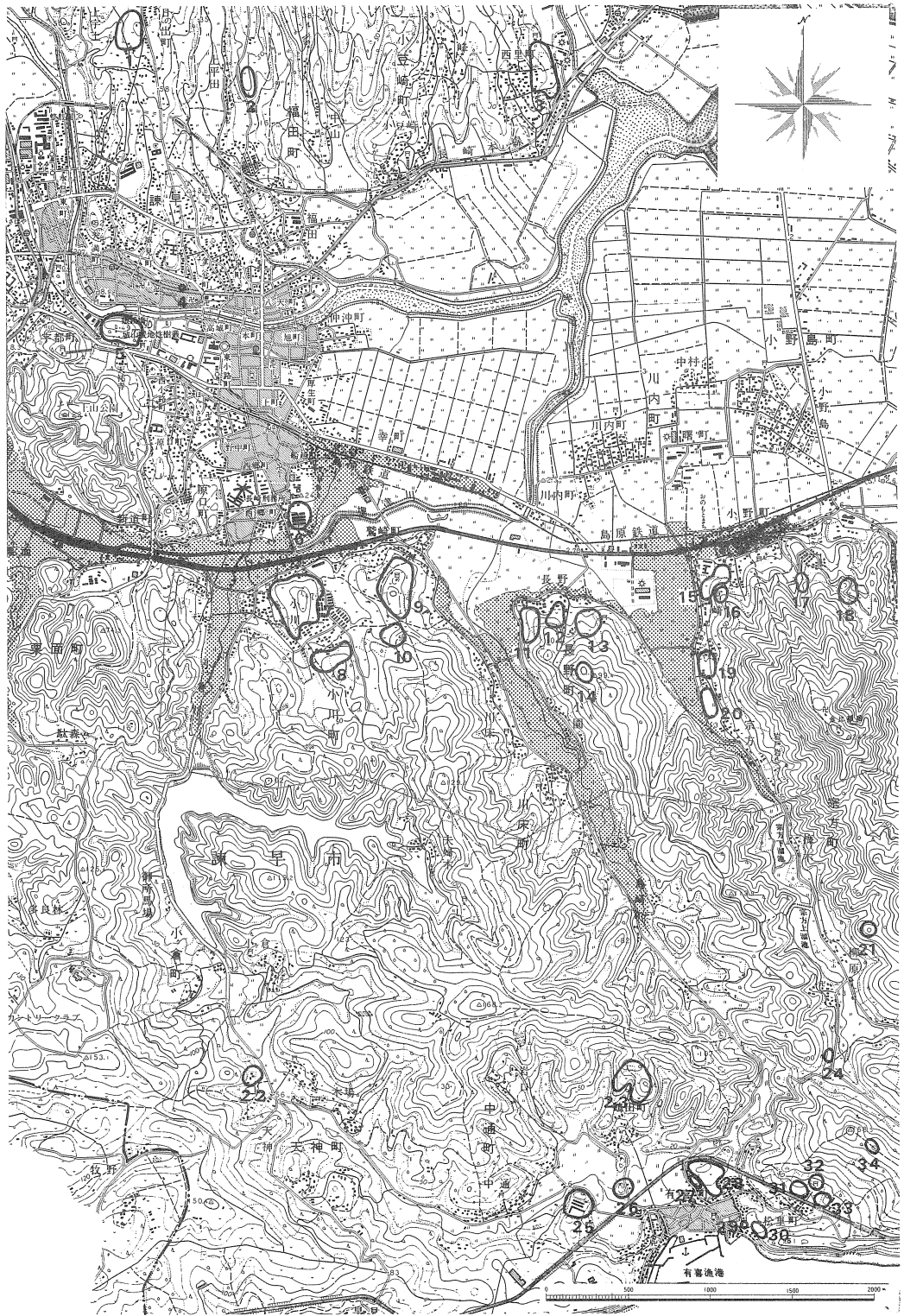
有喜貝塚および六本松遺跡は、諫早市松里町に所在し、橘湾に面した丘陵上に立地し、標高14～16mを測る。国道251号線の北側、標高150mの小烏帽子岳から急角度で山肌が南へ延び、浅い谷部を形成して再び標高を増して急崖をなし橘湾へと没する。この急崖は比高7～11mほどを測り、崖面の斜度は60°～80°を示し、殆ど垂直に近い所が多く見受けられる。東方から西方にかけて比高が逡増し、延々と続く千々石断層の一部を形成している。

往時は第3図の破線で示すような崖線が存在していたとの事で、明治から大正にかけて切り崩し、遺跡南の埋立ての用に供したと伝える。しかし、貝塚自体の規模にさしたる変更は地形的に見て無かったようである。貝塚から西側へ行くと高度を逡減して有喜川に接し、南へ行くと僅かの比高で旧海岸線に接していたのであろうと推される。

地層は、有喜火山群に属する有喜火山岩類が分布しており、数回の安山岩類の噴出によるものとされている<sup>註2</sup>。噴出順序は、有喜普通輝石安山岩、早見複輝石安山岩、岩戸山火山角礫岩、大久保角閃石複輝石安山岩、蓮華石岳角閃石複輝石安山岩、金刀比羅紫蘇輝石角閃石安山岩である。このうち、有喜貝塚の立地する地層は、有喜普通輝石安山岩で地表から低い所で4～6mで達するようである。上位には火山灰様土でかなり土壌化した茶色粘土層が厚く堆積し、これが貝塚のベースとなっ



第1図 諫早市位置図(1/1,600,000)



第2図 遺跡分布図(1/40,000)

第1表 遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	立地	出土遺物等	時期
1	折山頭	諫早市日の出町折山頭	標高 60m 丘陵上平坦部		
2	窪ノ谷	〃 福田町上平田	〃 50m	剥片他	
3	西里	〃 西里町	〃 20m 丘陵先端部	縄文式土器, 弥生式土器, 剥片他	縄文～弥生
4	金谷	〃 金谷町	〃 18m	織部燈籠	近世
5	高城々址	〃 高城町	〃 50m 独立丘陵	本丸, 空濠, 土塁他	中世
6	諫早農高	〃 船越町	〃 10m	細形銅剣, 弥生式土器他	弥生
7	林ノ辻	〃 小川町	〃 40m 丘陵全域	弥生式土器, 箱式石棺, 甕棺, 中世墓, 青磁他	弥生～古墳～中世
8		〃	〃 40m 〃	弥生式土器他	弥生
9	十仙平	〃 鷲崎町	〃 40m 丘陵頂部	剥片他	縄文
10	源内谷	〃 小川町	〃 30m 丘陵鞍部	剥片, 碎片他	〃
11	崎田	〃 長野町	〃 25m 丘陵先端部	弥生式土器, 剥片他	弥生
12	大久保	〃	〃 30m 丘陵斜面	剥片, 碎片	縄文
13	水葉山	〃	〃 20m 〃		〃
14	長野城址	〃	〃 100m 山頂		中世
15	宮崎館	〃 宗方町	〃 20m 丘陵先端部	ナイフ形石器, 石鏃, 弥生式土器, 土師器, 青磁他	旧石器～中世
16	小野城址	〃 小野町	〃 40m 丘陵頂部	本丸, 空濠, 六地藏石幢他	中世～近世
17	小野貝塚	〃	〃 40m 丘陵先端部	弥生式土器, ウミニナ, ハイガイ他	弥生
18	内野	〃	〃 60m 〃	弥生式土器, 石鏃他	〃
19	水の手	〃 宗方町	〃 10m 丘陵		古墳
20	太郎丸	〃	〃 10m 水田部	弥生式土器	弥生
21	宗方城址	〃	〃 100m 丘陵頂部		中世
22	堤の端	〃 天神町	〃 60m 丘陵	石刃, 剥片, 碎片	縄文
23	鶴田城	〃 鶴田町	〃 80m 丘陵頂部		中世
24	木秀古墳	〃 長野町	〃 70m 丘陵	横穴式石室2基, 須恵器他	古墳
25	宇木城	〃 有喜町	〃 30m 丘陵先端部		中世
26	〃 (二の丸)	〃	〃 10m		〃
27	上原貝塚	〃 松里町	〃 10m 丘陵斜面	縄文式土器, 弥生式土器, 土師器, 鉄鏃, 獣骨片他	縄文～古墳
28	上原	〃	〃 30m 丘陵上平坦部	弥生式土器, 剥片他	弥生
29	有喜貝塚	〃	〃 20m 丘陵先端部	縄文式土器, 弥生式土器, 箱式石棺他	縄文～弥生
30	六本松	〃	〃 30m 丘陵斜面	弥生式土器, 石鏃, 剥片他	〃
31	平の上	〃	〃 40m 丘陵	剥片, 碎片他	縄文
32	熊野神社	〃	〃 40m 丘陵上	宝篋印塔, 五輪塔他	中世～近世
33	有喜大久保	〃	〃 40m 丘陵	剥片他	縄文
34	小烏帽子岳古墳	〃	〃 140m 丘陵頂部		古墳

ている。

周辺の遺跡には、有喜貝塚とほぼ同様の立地を示す上原貝塚<sup>註3</sup>、上原遺跡がある。数片の阿高式土器と弥生後期の土器片および鉄鏃が採集されており、当時の活動のメカニズムを知る上で貴重な遺跡である。特に、低位の水田地帯は古くは河口部もしくはラグーンとして存在した可能性があるため、その周縁の調査が緊要である。また、有喜貝塚の后背地に当る六本松遺跡では、今回遺構・包含層の確認はなされなかったものの、住居址等の存在が見込まれよう。

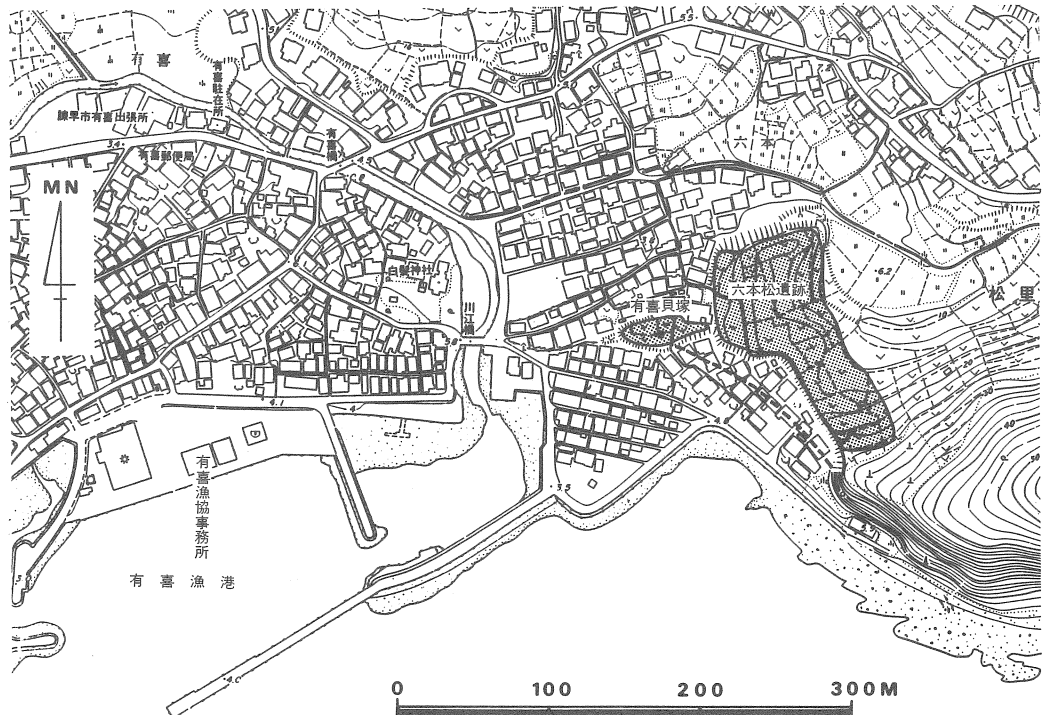
古墳時代になると、小烏帽子岳古墳がある。標高140mの尾根上に立地する小円墳で、片袖式かと推される横穴式石室を内部主体としており南に開口している。盗掘にあっており天井部が破壊されているが、市内では数少ない古墳であり解明の要が感じられる。

中世期に入ると宇木城および二の丸、鶴田城が認められる。宇木城は標高30mほどの丘陵先端部に位置し、狭少な平野を見下すように築城され、下方に二の丸と言われる<sup>ガメンクビ</sup>亀首が水田中に僅かに屹立している。鶴田城は標高80mの丘陵頂部に立地する。これら両城主の居住地は未だ判明しておらず、その解明も待たれるところである。

以上、周辺の遺跡を概観したが、時期的に偏りが見られる点は否めず、今後の総合的な調査の必要が認められる。

註2 橘 行一 「諫早水害における山崩れと災害」『諫早水害誌』所収 1963

3 秀島貞康 「上原貝塚の採集遺物」『諫早史談』 第13号 1981



第3図 遺跡周辺地形図(1/5,000)

### III 遺跡の調査

#### 1. 調査の経過

急傾斜地崩壊対策事業の対象となった有喜貝塚および六本松遺跡の調査経過を日誌抄を基に概略を記す。

##### ● 7月11日～14日

11日に現場入り。作業に従事して頂く方々と自己紹介の後、草刈り、調査器材の搬入。器材は浜義光氏のご厚意で小屋に収納させてもらう事となった。小径の西側にA区・東側にB区を設定。A区表土排除作業、攪乱特に著しく、1mを超える。また基盤も南側へ急激に落ち込んでいる模様。東壁寄りに僅かに混土貝層残存か。B区の表土排除を行う。攪乱に伴うかき出しで厚く再堆積し、土塊・岩塊多し。表土・客土部から遺物は縄文式土器が多く、弥生式土器を含めて大ポリ袋1袋分くらい出土。六本松遺跡の試掘実施。

##### ● 7月15日～17日

終日豪雨のため作業中止。大雨降水注意報および警報発令される。

##### ● 7月18日～20日

A区。既設の調査区では貝層が僅かしか検出できないため東方へ拡張。黒褐色混土貝層（I層）の調査を行う。蛇紋岩製の礫器出土。B区。表土排除完了し黒褐色を呈する混土貝層調査。土器は細片化しており、獣骨は破碎された状況で出土。市来式系統の土器片、阿高式系土器片、弥生式土器片出土す。

##### ● 7月21日～23日

A区。黒褐色混土貝層の調査。下位になるに従い二枚貝が減少する傾向が認められるようだ。

B区。黒褐色混土貝層から磁器等の出土を見る。後世の攪乱をかなりの程度受けているものと推量されるが、貝自体の潰れの状態はあまり見られない。下層に茶褐色を呈する粘質土があるが、貝類は含まず、面的拡がりも少ない。このレベル位までが、大正14年の調査時の埋め戻しにかかるものかとも推される。

##### ● 7月25日～28日

A区。昨日までの黒褐色混土貝層下に茶褐色粘質土が存在し、その下層に再び黒褐色混土貝層が出現。茶褐色粘質土層は約5cm程の薄いもので、上下を分つほどの間層とは言えないのかとも思われるが面的把握が不可能なため、一応上層をI層、間層をII層、下層をIII層とする。III層においてブロック・サンプルを30cm四方、12cmの厚さで採取。

B区。上位の黒褐色混土貝層とは異なるガチガチに締まった茶褐色の貝層調査開始。この上層までが攪乱かとも推されるが判然としない。上層をII層とし茶褐色の混土貝層をIII層とする。

● 7月29日～8月2日

A区終了し、土層図作製、写真撮影を行い、8月1日に埋め戻しにかかる。B区、III層の調査継続。III層の下に茶褐色の砂質土が現れる。B区での分布範囲は狭く、セクション・ベルトから東へ1mほどである。この層からは瓦の出土が見られ、III層をかなり攪乱している。IV層の下位に破砕度のかかなり高い貝層があり薄く堆積している。III層下部とも考えられるのであるがIV層を挟在するためV層とする。南方に行くに従い砂質化し、かつ破砕度も激しく層の線引きが困難となる。貝塚の末端を示すものであろう。新たにC、D区を設定。C区は植栽の関係で1×1mと狭少。表土排除を行い、貝層の調査へ移る。D区表土排除。北西隅において表土下約70cmで鐘ヶ崎式系土器の大きな破片出土。E区の設定をし、表土排除始める。測量杭の設定を行う。

● 8月3日～8月10日

B区、V層調査。下位の茶色粘土層をVI層とする。ボーリング・ステッキによれば深さ1mを超える。C区混土貝層(II層)調査。南西隅は攪乱著しい。下位に純貝層がある。ブロック・サンプル採取。D区、茶褐色粘質土(I層)調査。礫器・石ノミ出土。下の貝層との境界はかなりの凹凸が認められる。E区、表土および攪乱層(B区IV層に対比)の排除を行う。

● 8月11日～8月16日

盆休み

● 8月17日～8月29日

B区、V層調査。単式の小型釣針、サメ歯製垂飾品出土。C区、東へ1m拡張。茶褐色粘質土(I層)から御手洗A式小片出土。茶褐色混土貝層(II層)中より後期の貝殻条痕文土器出土。純貝層(III層)よりクロツケガイの集合を東南隅で確認。その下位にウニの集積確認。任意に取り上げる。同層から砂岩製の石庖丁形石器出土。D区、黒褐色混土貝層(II層)調査。特徴のある脚台部出土。ブロック・サンプル採取。II層下部で焼土塊・炭化物が部分的に認められる。24、25、27～29日雨のため作業中止。27日にC区土層図作製。

● 8月30日～9月5日

B区終了、土層図作製、写真撮影を行う。C区、茶褐色混土破砕貝層(IV層)調査後、土層の転写作業を雨の合間を縫って行う。D区、II層調査。31日～5日まで雨のため作業中止。

● 9月6日～13日

C区、転写作業。D区、II層調査。下部から炭化物・焼けた貝が見られるが遺構の検出は難しい。この下位にカキを多出する土壌があり、赤黄色系統の粘質土が覆土である。E区はB区IV層の攪乱が最下低までおよんでいた。僅かにB区V層と同一層が認められた(III層)。地形測量を併行して行う。12・13日雨のため作業中止。

● 9月14日～9月17日

C区の転写完了。D区土壌の完掘、D区の土層も転写を行った後、両区共に埋め戻しを行う。

地形測量を行い、発掘調査すべて終了。器材・遺物を諫早市郷土館へ搬入する。

## 2. 調査区の設定および層序

今回の調査は、崖面に接する調査区の設定を行ったため、面的な調査が十分に実施できなかった。六本松遺跡は、崖上面の線から東へ1～1.5mほどが工事区域となっており、且つ東南位の墓地に通じる小径が通っているため、僅かな試掘を行った。結果は包含層が認められなかったため、調査の主体を有喜貝塚に集中させることとした。

貝塚では、任意に調査区を設定し、A～Eと称した（第4図）。B・E区は大正期の既掘部と一部重複すると想定されたため、報告書を参考に調査区主軸の割り出しを行ったが、復元することは不可能であった。同報告書に依れば、純貝層が確認されており、崖面近くに調査区が設定されていた。これは、B・C区近辺であることを示しており、果たしてC区において純貝層が確認され、また調査区西側に攪乱の痕跡を認めることができたのは、大正14年調査時の調査区東限が、C区におよんでいたことを示している。

また、付近の方々の話によると、現在南北に走る小径付近で1号人骨以下の発見がなされたとのことであり、不十分ながらも当時の主軸を求めれば、第4図のようにならうかと推定される。或は、主軸が少し東位にズレ込むとも考えられる。

次に各区の層序の概略を記す（第5図、図版1）

### ●A区

表土および客土

I層 黒褐色混土貝層

II層 茶褐色粘質土層

III層 黒褐色混土貝層

岩盤

### ●B区

I層 表土および客土

II層 黒褐色混土貝層

III層 茶褐色混土貝層 強く締まった貝層。

IV層 茶褐色砂質土層 乾燥すると堅い。

V層 茶褐色混土破碎貝層

V'層 茶褐色混土破碎貝層 V層より更に  
破碎度が進み、砂質を示す。

VI層 茶色粘質土 貝塚の基盤層。

### ●C区

表土層

0層 淡黒色破碎混土貝層

I層 茶褐色粘質土層

II層 茶褐色混土貝層

II'層 茶褐色混土破碎貝層 ブロック化したII層が入る。

III a層 純貝層 オオコシダカガンガラ主体。

b層 純貝層 オキシジミ主体。

c層 純貝層 オオコシダカガンガラ主体。

IV層 茶褐色混土破碎貝層

V層 茶色粘質土 火山灰様土で、土讓化が進んでいる。 貝塚の基盤層。

### ●D区

表土層

I層 茶褐色粘質土

I'層 茶褐色混土貝層 I層中に貝を含む。

- |       |           |               |       |         |                   |
|-------|-----------|---------------|-------|---------|-------------------|
| II a層 | 茶褐色混土貝層   | カキ主体          | V'層   | 淡黒色粘質土  |                   |
| b層    | 茶褐色混土貝層   | オオコシダカガンガラ主体。 | VI層   | 橙茶色粘質土  | 締まりのない層で、焼けた貝を含む。 |
| c層    | 茶褐色混土貝層   | カキ主体          | VII層  | 淡茶色混土貝層 | カキを多含し、締まりのない層。   |
| III層  | 茶褐色混土破砕貝層 |               | VIII層 | 淡茶黒色粘質土 | スミを僅かに含む。         |
| IV層   | 茶色粘質土     | 貝塚の基盤層        | IX層   | 茶色粘質土   | IV層より締まりがない。      |
| V層    | 淡黒色粘質土    | 炭化物と焼けた貝を含む。  |       |         |                   |

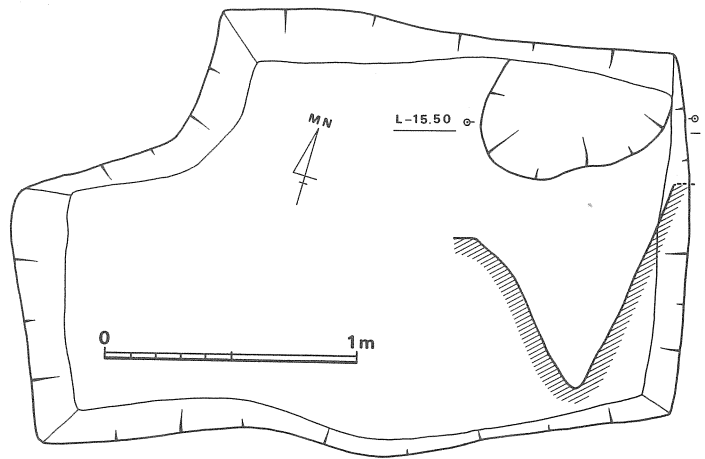
以上、土層を列記したが、その併行関係は右に示す。

A区とB・E区は近距離にありながら内容は異なる。B・E区とC区の関係も同様で、大正期の調査によるものとする。C区とD区はある程度把握でき、C区のみ純貝層が存在する。a・b・cと小区分したのは小範囲の平面および断面観察によるものである事を断わっておく。D区II層も同様である。各区の基盤となるものは、岩盤および茶色粘質土である。茶色粘質土から遺物の出土を見るが包含層でなく、上層からの落ち込みと考えられる。	A区	B・E区	C区	D区
	表土	I	表土	表土
	I	II	I	I
		III	II	II <sup>a</sup> b c
	II	IV	III <sup>a</sup> b c	
	III	V	IV	III
	岩盤	VI	V	IV

自然遺物分析のためのブロック・サンプルを各調査区において採取した。採取量は30cm×30cm×10cm=9,000cm<sup>3</sup>を原則とした。C区・D区については第5図の土層図に投影している。地点はA区III層、B区V層、C区II・III・IV層、D区II・III層の7地点。分析結果はVIに掲載している。

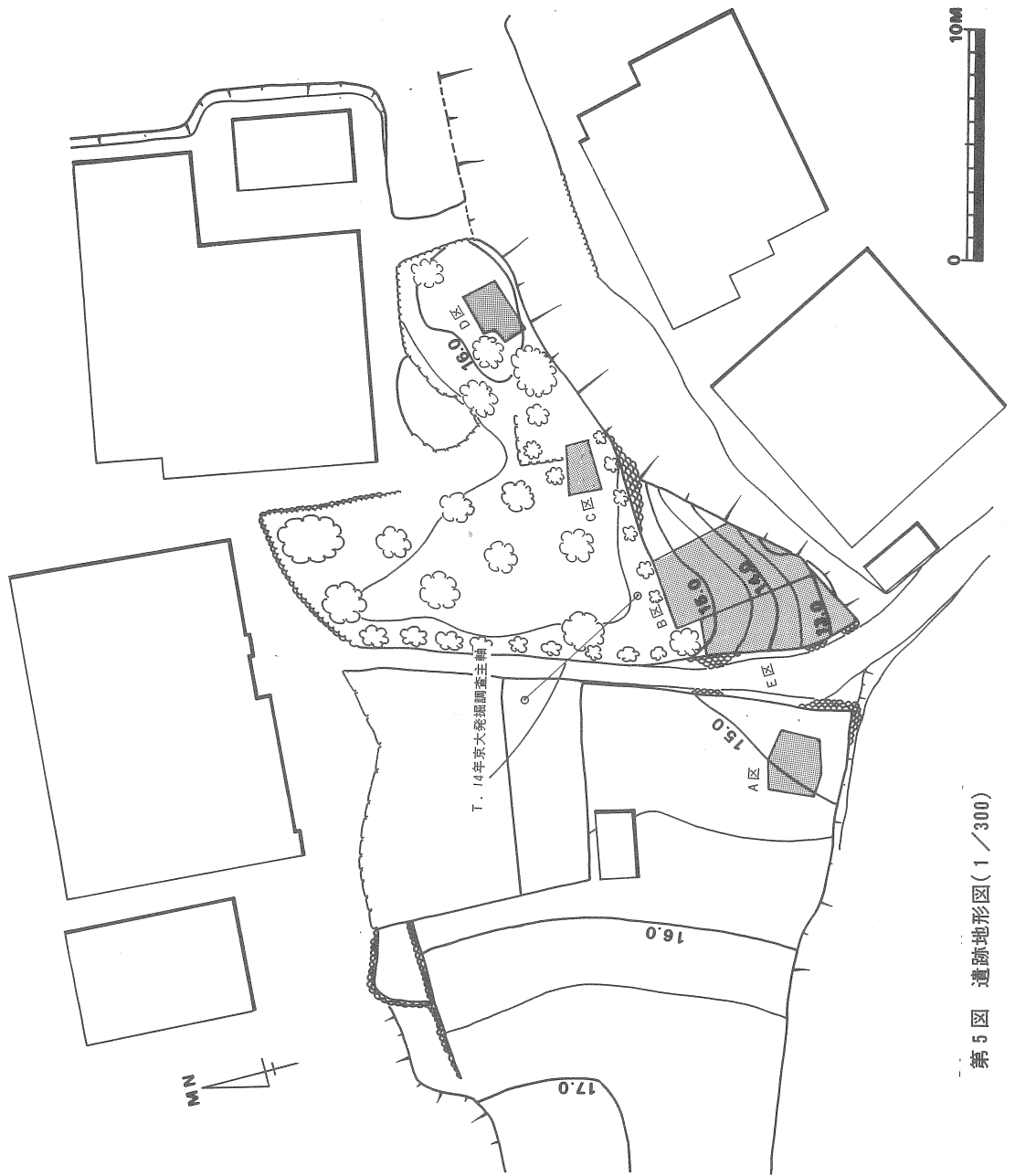
### 3. 遺構 (第6図・図版3, 6)

D区北壁に入り込む不明土壌を一基検出した。平面プランは不明であるが、南側は径約75cmほどの弧状をなす。深さは約80cmで断面V字形をなす。土壌の掘り込み面はIII層中からで、第5図のV~IX層が覆土と思われる。出土遺物は第19図に示す通りであり、後期前葉の所産と考えられる。この土壌の性格・機能については不明である。

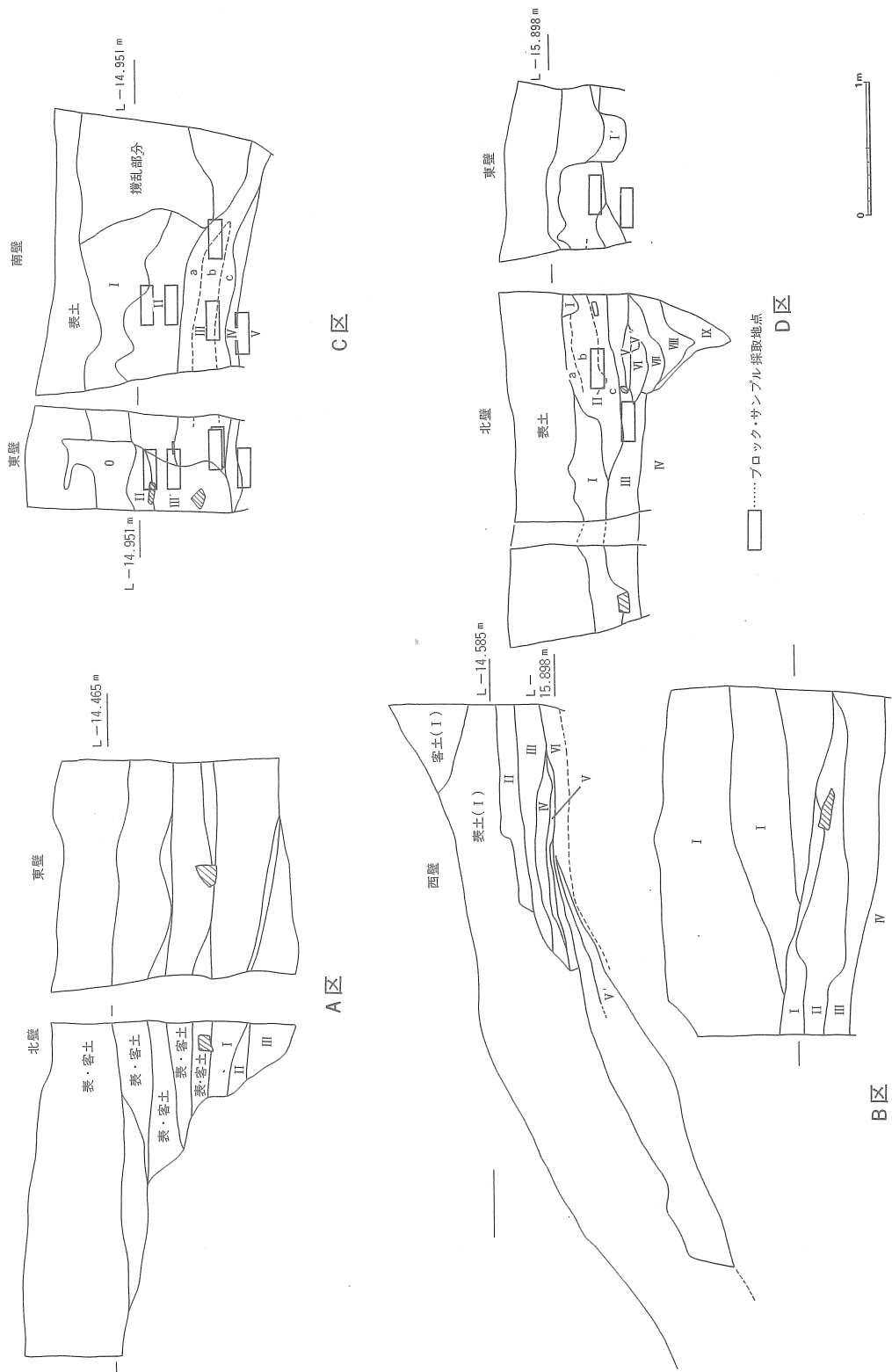


第4図 不明土壌 (1/30)





第5図 遺跡地形図(1/300)



第6図 土層断面図(1/50)